

中島学区における地域気象情報の取組について

平成28年4月1日
京都大学防災研究所矢守研究室

1、気象情報の課題に対して

災害が起こる際には、たくさんの災害情報が社会にあふれます。気象情報もその一つです。しかし、気象情報がよく当たるようになり、より利用しやすいものに改良されていく一方で、実際の災害の際には、情報ばかりに頼ってしまいどうしようか考えるだけで、次の情報を待ってしまう場合や、情報から十分な危険がわからない場合もよく見られます。

このような課題に対し、我々は、災害に対する事前情報として重要な役割を果たす気象情報をより防災・減災につなげるため、その社会利用における情報のあり方を探究しています。その一つとして、地域気象情報という新たな気象情報の社会システムの検討を進めています。

2、地域気象情報とは

地域気象情報は、専門的なたくさんの気象情報を、地域に身近な表現を利用した自分達の災害リスクに関係する情報として利用することで、地域の状況を理解し、災害への危険意識を事前に高めることを助け、災害への適切な対応へと結びつけることを目的としています。

また災害に遭遇する可能性のある地域住民自身も情報内容に関わることにより、情報への意識を高めるといふ点も特徴です。このように、地域気象情報は単にわかりやすさや理解を進めるだけでなく、関係者間の共同構築を通じて生まれるものであり、気象情報を通じた災害リスクコミュニケーションを生み出すものでもあります。気象情報に関わることを通して、利用者の気象情報に対する意識を、単に受け取るものから、自分達に関わるものに変換し、主体的な利用を促します。さらにこのような取組を継続することで、災害を我が事として捉える地域の災害文化の醸成が期待されます。

3、伊勢市中島学区における取組

伊勢市中島学区においては、中島学区まちづくり協議会、伊勢市危機管理課、津地方気象台、京都大学矢守研究室などが連携し、試験的に中島学区地域気象情報の実践利用に向けた取組を実施しています。

住民は地域の災害を一番よく知る者として、伊勢市は地域防災の責任者として、気象台は気象情報の専門家として、それぞれの立場からともに連携して、地域にとって重要な気象情報はどのようなものかを検討しています。

なお、現状として独自の気象情報を作成することは法的にも体制的にも難しいことから、現状の取組は気象台が発表する気象情報を地域で有効利用するという形を採っています。



4、これまでの取組状況

中島学区では平成 24 年度から気象情報に関わる様々な取組を進めてきました。ここでは、その取組の一部を紹介します。なお、同地区に位置する宮川中学校においても気象情報に関する実践型防災教育を実施していることから、併せて紹介します。

- 各種地域防災イベントの開催（図1）

風水害を主なテーマに、地域のハザードマップ作り・ウォークラリーを通じた災害に対する意見交換、クロスロードゲームなど、宮川中学校の生徒も参加し、地域住民とともに、防災イベントを開催しました。

- 宮川中学校における実践型防災教育（図2）

気象情報の利用を主眼に、社会で利用されている各種気象情報について学ぶなど、実践的な防災教育を進めています。また学校の玄関に気象情報モニターを設置し、登下校や部活動の際に天気を確認できるようにすることで、生活防災の視点を導入し、日頃から気象情報に触れる環境を設けています。



図1. 各種地域防災イベント

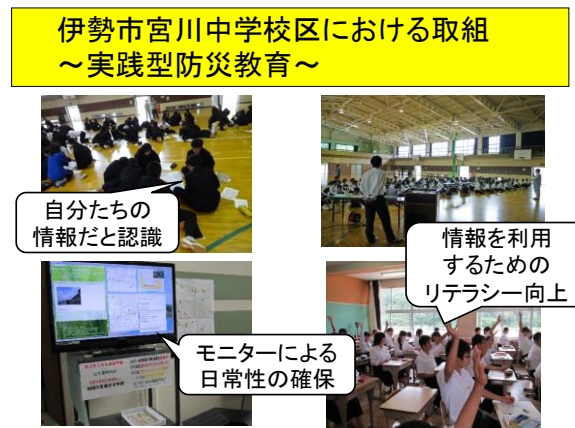


図2. 宮川中学校における実践型防災教育

- 地域気象情報モニター（図3）

地域の住民がよく利用する地域の中心に位置するスーパーマーケットに気象情報モニターを設置し、学校の気象情報モニター同様、生活防災の視点から買い物のついでに気象情報に触れることができる環境を設けています。またこのモニターは単に気象情報だけでなく、地域のイベントや写真なども表示することができ、地域のコミュニケーションツールとしての機能も持っています。気象情報に特化するのではなく、日常の生活の中の一つとして、気象情報に触れることができるようになっていきます。

※生活防災は、福祉、環境、教育といった日常の生活と切り離さない防災のことを意味します。つまり、日常生活と防災を分けず、結びついたものとして捉えるものです。

- 中島学区防災の日活動・中島学区防災フラッグ運動（図4）

中島学区では、毎月11日を中島学区防災の日とし、毎月1回災害について考えるなど家庭の防災について見直す日としています。この防災の日と関連して、地域全体で中島学区防災フラッグ運動を実施しています。防災フラッグ運動は、ピンク色の物を身につけて互いに災害を意識しようという取組です。毎月11日の地域の住民が防災エコバッグや防災ハンカチなどのグッズを身につけて買い物をすることで、自身も防災を意識するとともに、それを見た周りの人も上は防災の日だと防災について考えるきっかけを提供します。また地域気象情報が発表された

場合も同じようにすることで、これから災害に注意する意識を持ってもらうことを目指しています。

地域気象情報モニター(生活防災)
～地域のスーパーマーケット～



図3. 地域気象情報モニター

中島学区防災フラグ運動
～中島学区防災の日活動～



図4. 中島学区防災の日と防災フラグ運動

・地域気象情報の共同構築の試行(図5)

中島学区の住民、伊勢市危機管理課、津地方気象台が参加する形で、実際に関係者で中島学区の住民たちが注意すべき地域気象情報の共同構築を試行しました。まず住民達が普段気づいている地域の災害現象を挙げ、その情報を基に、関係者が情報について協議する形で、具体的な中島学区地域気象情報の検討を行いました。

平成26年7月1日からは試験的に3つの情報(表1)について、中島学区まちづくり協議会連絡網を通じて、情報を共有する取組を開始しています。

気象情報の共同構築イベント
～情報検討過程と情報作成過程～



図5. 気象情報の共同構築の試行

表1. 現在の中島学区地域気象情報

情報内容
① 辻久留地区の住民は浸水に備えよう情報
② 度会橋オレンジ水位超える情報
③ 辻久留台の裏山危険情報

・生活防災タイムライン(図6)

中島小学校における全学年を対象とした防災教育の一つとして、小学生と地域住民と一緒に「生活防災タイムライン」の作成に取り組みました。

生活防災タイムラインは、単に「災害時の行動=危なくなってから避難」と捉えるのではなく、地域気象情報などを利用して、災害が発生する前に生活の中でどういう行動が必要か事前に考え確認しておくものです。特に大雨や暴風の災害については、災害の発生前においても、外に出かけて転倒したり、田畑を見に行き水路に流されたりして被災することも多いのが現状です。こういったことから、単に危なくなってから避難だけでなく、災害を日常生活の延長線上のものとして、考えておくことも重要です。それぞれの時間帯の前にはしておくべきことやしてはいけないことを、一人一人が考え、「早期の災害対応、自主避難」を目指しています。



図6. 生活防災タイムラインの取組

5、平成28年度の取組予定

気象情報や河川情報について理解を深めたり、地域気象情報の取組に参加しただけでは、十分ではありません。今後、地域防災の文化の一つとして取り組んでいくことが必要があります。そのためには、一人一人の意識と地域の連携が重要となってきます。

平成28年度は、「地域」と「学校」の連携を深めることを目標に、これまでの取組をより充実させていきます。地域の防災イベントへの児童の参加や学校における防災教育への地域住民の参加等を通して、地域が一体となって地域気象情報の取組に参加することを目指します。

6、今後の気象情報のあり方

地域気象情報の取組は、現在の気象情報を否定するものではありません。むしろ気象情報と社会がどのように向き合っていくかを考えるきっかけとするものです。普段の生活にとって身近な気象情報、災害時にもその気象情報を単に受け取るものとしてではなく、普段の天気と同じく、身近な情報として利用することで、適切な災害対応を目指すものです。これは地域防災というものを、気象情報を通じて自分たちのものとして再構築するとともに、高度に発展した気象情報をそこに取り入れることで、より高度な防災を目指すものです。

防災における行政依存の課題が指摘される社会において、地域防災を様々な主体がサポートし、ともに作り上げていく社会を我々は気象情報を通じて提案しています。

